

いたずらっ子ケン

沖縄・子どもと教師の文学の会/編

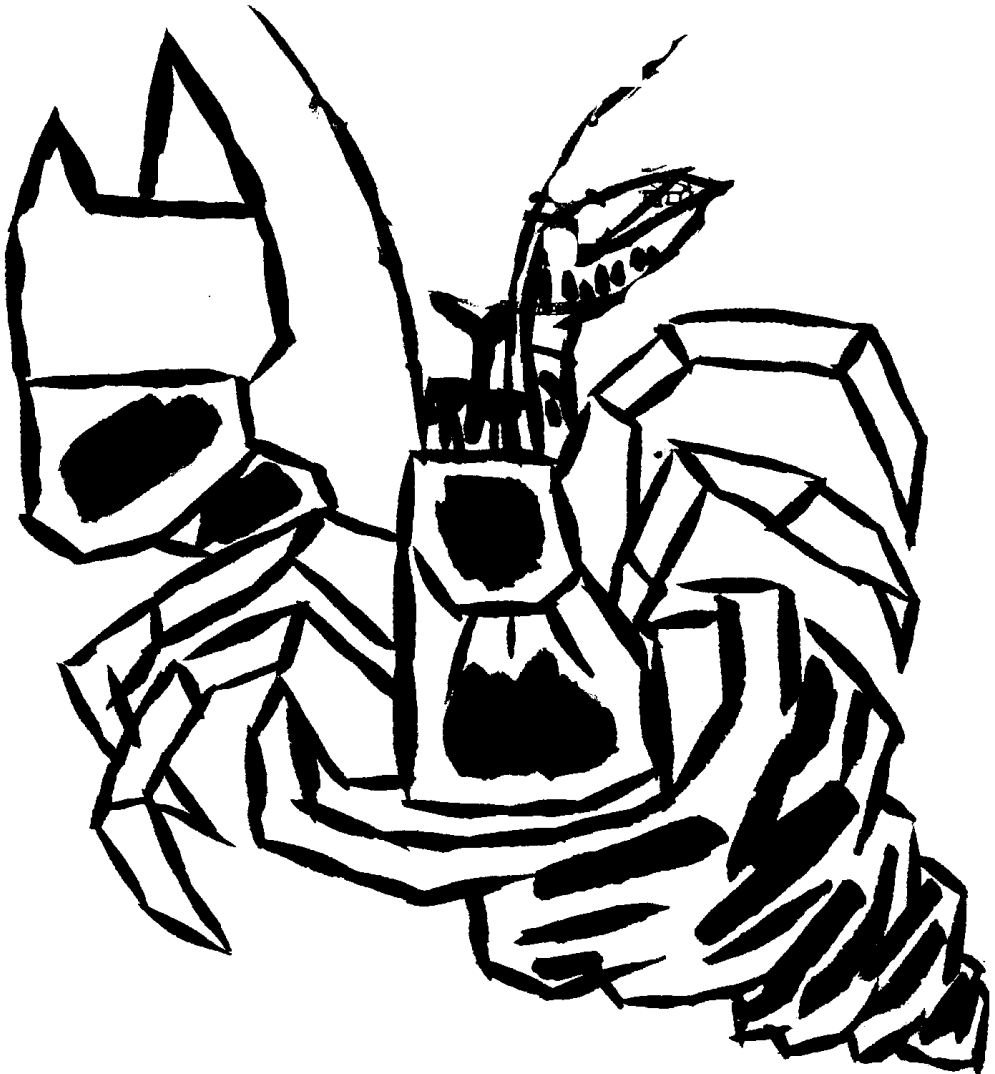
赤羽末吉/絵



いたずらっ子ケン

沖縄・子どもと教師の文学の会/編

赤羽末吉/絵



沖縄・子どもと教師の文学の会／編

いたずらっ子ケン

ポプラ社 昭和51 (1976)

166p 22cm (先生のとおきのお話 8)

〔分類〕 918

いたずらっ子ケン

検印省略

先生のとおきのお話 8 〈沖縄編〉

沖縄・子どもと教師の文学の会／編

那覇市古島70-1 郵政ビル3-209 徳田滄方

昭和51年8月 発行◎

発行者 久保田 忠 夫

発行所 ポ プ ラ 社 千160 東京都新宿区須賀町5
振替 東京 4-149271

印刷所 新興印刷製本株式会社 製本所 島田製本株式会社

落丁・乱丁本はいつでもおとりかえいたします

8095—056008—7764

はじめに

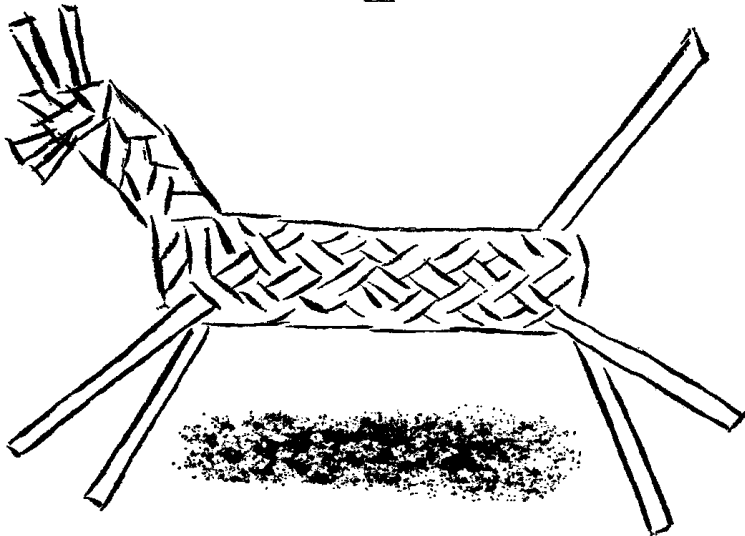
沖繩おきなわはあつい。

太陽たいようはやけつくようにてりつける。

土の中までこんがりやける。

こんなあつい沖繩で、みんないっしょうけんめいに生きています。そこには沖繩のよさがある。沖繩の土くささがある。

その沖繩の心といえますか、土くささといえますか、そんなものをすこしでも、この本を読んでさぐってもらえたらいいなあーと思います。



徳田とくだ
渙きよ

もくじ

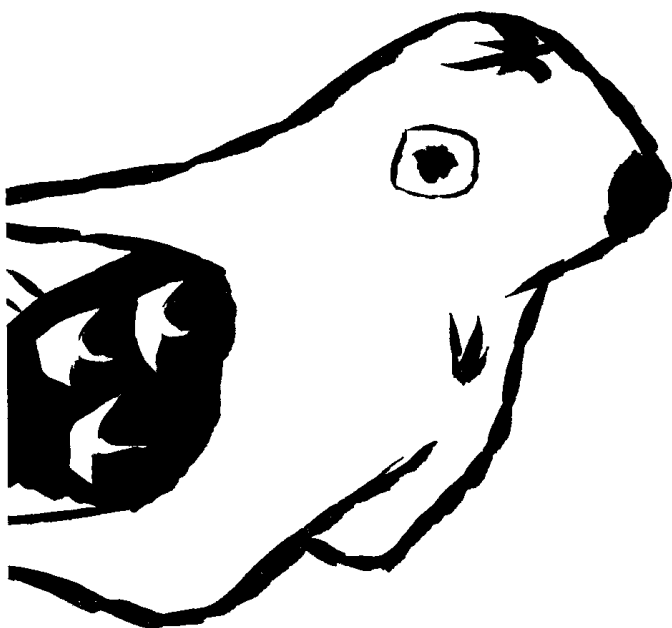
はじめに 1

いたずらっ子ケン 6

愛子^{あいこ}ちゃんと山原^{やんばる}戦^{せん} 34

しらみだいじ 52

ひげのポケット 66



マブヤーグミ 85

ハブ騒動^{そうどう} 111

弓子^{ゆみこ}ちゃんと不発弾^{ふはつだん} 126

マブイをかえした話 140

ウマチー 153

あとがき 164



編集委員

児童文学者	代田	昇
壺屋小学校長	徳田	渢

(アイウエオ順)

画家紹介

赤羽末吉 1910年東京に生まれる。戦前満洲に渡り、終戦後帰国し「かさじぞう」で絵本界に登場。日本童画会展・茂田井賞、「白いりゅう」「黒いりゅう」「ももたろう」でそれぞれサンケイ児童出版文化賞、「スーホの白い馬」でサンケイ児童出版文化賞・米ブルックリン美術館賞、「源平絵巻・衣川のやかた」で講談社絵本賞、「ほうまんの池のカッパ」で小学館絵画賞・国際アンデルセン賞1976年度優良作品などの様々な賞を受賞する。
現住所 鎌倉市寺分601-3

いたずらっ子ケン

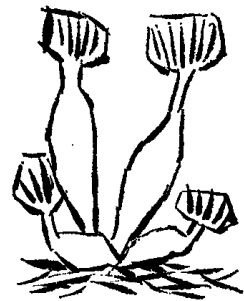
沖縄・子どもと教師の文学の会/編

赤羽末吉/絵



いたずらっ子ケン

久手堅憲俊
くでけんけんしゅん



—

首里城の一番めの門、中山門を「しむぬ」と、としよりたちは、よんでいました。

とりいのかたちをした赤がわらの屋根は、二重になっていたそうです。それが、いっしかくずれ落ちてしまい、昭和のはじめごろには、はばが一メートル、長さが二メートルほどの黒い大きな石が、じやりのあいだから四つの顔をのぞかせているだけになっていました。

ケン、三郎、セイジそれにトシヲたちがよく遊んだなわばりは、中山門と守礼門（いいんといし上のとりい）のあいだにある、ほぼ七百メートルの道のうち、東よりの二百メートルや、ケンの母校の第二小学校の校庭や、夏休みになるとよく泳いだりゆう

たん池、それに、母親からだなられたときに、にげこむにはまことにつごうのよい、池のほとりの林のなかなどでした。

ケンの家は、守礼門から、だらだらしたゆるい坂を百メートルほどおりたところにある小学校のうら門のすぐとなりにありました。だから、朝ねぼうのケンには、まことにつごうのよい家でした。

用務員のおじさんが、朝礼のかねをカンカンカンとたたき音をきいてから起きても、学校にはじゅうぶんまにあう近さだったからです。「ケン、学校はじまいしが、うきらに（ケン、学校はじまるぞ、おきなさい）」というアヤー（おかあさん）の声を聞いて、ケンは、ふとんの中からモゾモゾと首を出します。それからかた手をつかって、まくらもとのズボンをはきます。目の方は、「きのう、ランドセルをどこにほうりだしたかなー？」と、つくえの上や下にキョロキョロさせるのでした。ようやく、つくえの下にほうりだされているランドセルを見つけると、サッーと左手をのぼして、ランドセルのベルトをつかみ、その上に、うわぎをひっかけてから背中にしよい、くつをつっかけて、バタバタと小走りに、水がめのそばにある洗面台まで走ります。それから、右手だけで、ピチャ、ピチャと目のまわりをぬらすのです。もちろん、てぬぐ

いなんか持っています。水でちょっぴりぬらした顔は、うわぎのそででチョコチョコとふきます。それから家の庭をつきつて、一メートルほどの土手をかけあがれば、もうそこは小学校の運動場になっていたのです。カンカンという、用務員さんのたたくかねの音を聞いた子どもたちが、ぞろぞろ教室へ入りかけているところへ、ケンは、なにくわぬ顔でまぎれこみます。先生が教室のガラス戸を開けるころには、ちゃんとじぶんの席にすわっていたのです。

ねぼけた頭が、ようやくハッキリしてくると、ケンは、宿題をやってきてないことに気がつくのです。

「しまった。またわすれた。きょうはどんないいわけをしよう。」

ケンは、まい日そんなことばかり考えていました。だから出欠をとる先生に、「ケン」「ケン」と二、三回よばれても、まったく気がつかないことがたびたびありました。ケンにとっては、朝の一時間はほんとにゆううつなときでした。だから、ケンは

「あーあ、朝はいやだなあ、アヤーにはどなられるし、宿題はやってないし、早く夏休みにならんかなー。」

それこそ、正月のころからまい日まい日、夏休みをまちわびていました。

二

学校の名物^{めいぶつ}は、高さが五丈^{じょう}（やく十五メートル）もあるといわれている松の木と、運動場を東から南にとりまいてゐるヤシの木でした。

松の木は、太くてとてもものぼれませんが、ヤシの木は、ときどき五年生や、六年生がのぼって、ケンのうでより太くて、軸^{じく}の長さが三メートルもあるヤシの葉^はを落としてくれることがありました。そのころ、ケンや三郎^{さぶろう}やトシヲたちにとっては、ヤシの葉はたいへんな宝物^{たからもの}でした。

軸からはがした細長い葉っぱは、帽子^{ぼうし}をあんたり、ハブ小^{やわい}（おもちゃのハブ）をつくったりします。また軸からは、チャンバラゴッコの刀が三人分もつくれました。だから六時間めがおわり、先生がたが職員室^{しよくいんしつ}にひきあげてしまうと、運動場は、ケンや三郎やトシヲたちの天国^{てんごく}でした。

五、六年生が、ヤシの木にのぼるところにであったりすると、「葉っぱの番人^{ばんにん}になるからボクの分も一本よぶんに落としてくれ」と、ケンたちはよく、たのみこんだも

のです。

となりの家の六年生の次郎兄さんが、ヤシの木にのぼるときは、だまっけていても「こんど落とす葉っぱはケンだぞう」と、上から声をかけてくれました。

しかし、ぜんぜん知らない五、六年生には、番人になってやるだけでなく「こんど落とす葉っぱは、ビー玉十コとこうかんだ」とか、「パッチー（メンコ）一ダースにサツマイモ一コ」と、上から声がかかります。下からは、「高いよ、パッチーだけにしてよ」「ビー玉五コに黒ざとうだけ」とやりあったものです。でも、五、六年生たちには、いつもやられてばかりいました。葉っぱを落とした五、六年生は、おりてくると、パッチーを全部ださせて、気にいったものだけとりあげてしまう人もいました。また、ときには、二まいあわせにして、ひっくり返らないようにくふうした、だいたいじなだいじなパッチーを取りあげられて、泣きだす一年生もいました。

落としてもらったヤシの葉っぱは、葉先の五十センチほどのこして、一まい一まい葉をはがし、軸とバラバラにして、刀、ハブ小、帽子とわけて、五、六人でブーサー（ムシケン遊び）親指がぞう、人さし指が人、小指がアリという約束で、ぞうは人に勝ちアリには負け、人はアリに勝ってぞうには負け、アリはぞうに勝って人に負け）をして、勝った順



に好きな物をとってよく遊びました。

ヤシの木にのぼった上級生は、この葉っぱを二本も三本も持っていて、「軸をやるから、そりにして運動場を二回まわれ」「三回まわれ」などといったは、いばっていました。ケンやトシヲや三郎たちは、ヤシの葉っぱがほしくて、上級生のいうとおりに動いたものです。

やがて、上級生のすてたヤシの葉っぱを、そりにして、かわりばんこに乗ったり、引いたりして、時間のたつのもわすれて遊びました。

運動場がすっかり暗くなり、アヤーが大きな声で、「ケーン、ゆうばーん(夕ご飯)」と食事の時間を知らせてくるまで遊ぶのでした。

三

夏休みになると、学校の北がわにあるりゆうたん池は、まったく子どもの天国といえるほどのいい場所でした。魚つり、せみとり、たきぎとり、ホテイ草の舟遊び、木の上のヤックワ(ヤグラ小屋)づくり、水泳など、遊ぶことがいっぱいありました。このりゆうたん池のまわりで、ケンやトシヲや三郎たちは、宿題などとてもやっ

るひまもないほど、いそがしいまい日をくりひろげていました。

とくに、ケンハ、コイのつかみどりがとくいでした。

夏休みに入ると、用務員ようむいんさんは、カンカン、カンカンと鳴ならす朝のかねをたたかなくなります。いや、そんなかねの音を待っていたら、きのうの夕がたしかけてきたコイのすに、三郎やトシヲたちに先をこされ、せっかく中に入ったコイを持っていかれるかもしれないのです。

コイのつかみどりをするには、まず、コイのすをつくってやらねばなりません。そのためには、池のまわりの石がきのうち、水の上に二十センチほど顔かほをだしている低い石がきをえらびます。つぎは、石がきのあいだにつまっている小石を、上の方からほりおこします。それでも、くさびの小石はそのままにしておきます。うっかりして、石と石をかみあわせるためのくさびの小石まで取ってしまうと、石がきは、全部くずれてしまうからです。

三十センチから四十センチもほると、穴あなのなかに、水がどんどん入ってきます。コイが入れるほどの大きさになると、ほるのをやめて、こん度は、水の下、十センチぐらいのところにある小さな石をえらんではずします。

ほった穴^{あな}から、手を入れて、くさびの小石をぬき、石を内側^{うちかわ}からゆさぶって、だんだんとはずします。これでできあがりです。つまり、石がきのこちら側に小さな池をつくり、大きな池とトンネルでつなげるのです。

そこで、魚の通^{とよ}る道をつくるのです。魚の道は、ホテイ草の下です。だから、石がきの内にも、外にもホテイ草をあつめてやります。内には、一つか、二つうかしてやり、外には、たくさんあつめたホテイ草のひげに、サツマイモをつぶして、すこしずつぬりつけ、石がきの内の池には、生のサツマイモをかみつぶして入れておきます。

コイは、サツマイモが大好きなので、イモにつられて、小さな池にやってくるのです。

「さあ、早く行かないと。」

ケンの頭のなかには、もう、バチャッ、バチャッとはねるコイがなんびきも泳^{およ}いでいるのです。

きょうは、目のまわりを水でぬらす「ケン式^{しき}顔^{かお}あらひ法」はしません。それでもちやんと、タオルをズボンのポケットにねじこんでからでかけます。アヤーがふしぎに思^{おも}って、